

巻頭言…に相応しくないが… なぜ、カメムシは大量発生するのか？

Entomology

カメムシが大量発生する年がある。2024年がそれで全国的にカメムシが大量発生して話題になった。どれがカメムシかわかる諸君から見ると本校は「カメムシが多い」と思うはず（そもそも日本には55科1300種以上のカメムシがいる）。岩波書店の「科学25/5」に掲載された記事（田淵研（2025））をベースに、大量発生メカニズムと、本校がカメムシの多い理由を考えてみたい。

カメムシが（特に2024年に）大量発生した理由は主に3つだとされる。すなわち①気象条件（＝高い平均気温）、②餌植物の豊作、そして③分布域の拡大である。

①カメムシは冬に至るまでが温暖だと例年なら死滅する幼虫が成虫まで成長できるので越冬個体が増加する。2024年は年間を通して暖かった。

②2023年は餌となるスギ・ヒノキが豊作だったため、翌年成虫となる幼虫の生存率上昇を押し上げた。

③近年の温暖化にともない、各種カメムシが生息域を順調に拡大した。これらの条件が複合的に重なったため、2024年の大量発生をもたらしたのである。

なお、本校の校内にはカメムシの餌となるスギ・ヒノキ類に加え、豊富な果樹類に恵まれている。各特別教室棟をはじめ、カメムシが侵入・越冬できる空間（隙間）に事欠かない。豊かな生態系は多種にわたるカメムシを収容可能である。これらの要因が、本校カメムシの個体数を押し上げているのである。生態系は「敵対より共生」である。仲良くやってほしい。

(Miyahashi)



冬の句

Haiku

雲がちの雲の色むら冬来る

棄て藁の散らばつてゐる冬田かな

形代の如くに残る木の葉かな

それぞれの高さを急ぎ冬の鳥

ラグビーの抽選会の日授業



(Maekita)

最近、冬になると天気予報で「日本海にJPCZが形成されて大雪になる予想です。」などと耳にする機会が多くなりました。JPCZはJapan sea Polar air mass Convergence Zoneの略で「日本海寒帯気団収束帯」といいます。冬季日本海では、大気下層の高度1 kmあたりを中心に、数日程度の間ほぼ同じ場所に停滞する長さが1000kmに及ぶ風の収束帯が現れることがあります。（収束帯：風が線状にぶつかる帯状の場所）

この収束帯は朝鮮半島の北部、北朝鮮と中国の国境にある長白山脈（最高峰は白頭山で標高2744m）に、シベリアからの寒気の吹き出しがぶつかり二手に分かれ、その風下にあたる日本海で再び合流して形成されるのです。

JPCZは一冬に数回～十回程度発生します。一般的には日本海側の北陸～山陰地域に向かって現れることが多いですが、もう少し北の東北～北陸地域に伸びることもあります。一例として今年の1月11日に見られたJPCZを取り上げます（気象衛星画像の図）。朝鮮半島の東海岸から吹き出た寒気によりできた「すじ状の雲」と、北朝鮮とロシアの国境地域から吹き出した寒気が日本海で収束している様子がわかります。収束した空気は上昇気流となりますが、このとき日本海の湿気を吸収しながら上昇するため雲を作ります。

日本の沿岸には「対馬海流」があります。世界を代表する暖流「黒潮」から分かれた暖流です。JPCZの底、すなわち日本の沿岸の海面は冬季でも10℃以上あります。ユーラシア大陸から日本列島に向かう冬の季節風は、はじめ-20℃程度あります。冬の風呂場を思い出してもらえばわかりますが、温度が30℃も違えば湯煙が上がります。こうして雲を作りながら日本に大量の雪雲を運んできます。

JPCZ発生のメカニズムは1980～90年代に盛んに集中観測やシミュレーション研究が行われました。21世紀になり、観測網が充実し、気象モデルの高解像度化・精緻化が格段に進歩し、JPCZの研究がどんどん進んでいます。

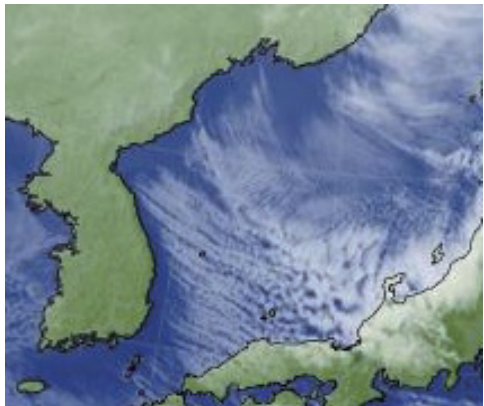
- JPCZの成因をまとめると、
1. 長白山脈による流れのせき止め（ブロッキング）
 2. ユーラシア大陸と日本海の温度差の効果（雲の形成）
 3. 対馬海流（暖流）による水蒸気の加速度的な供給

最後に、天気図では日本海上の等圧線にくぼみがあるときは要注意です。JPCZが形成されている可能性が高くなります。

(Higuchi)

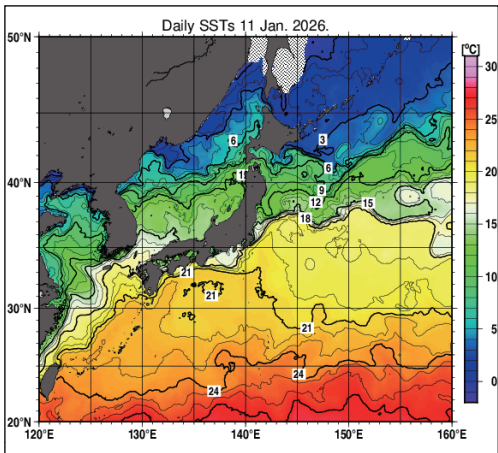


図版：Weather News



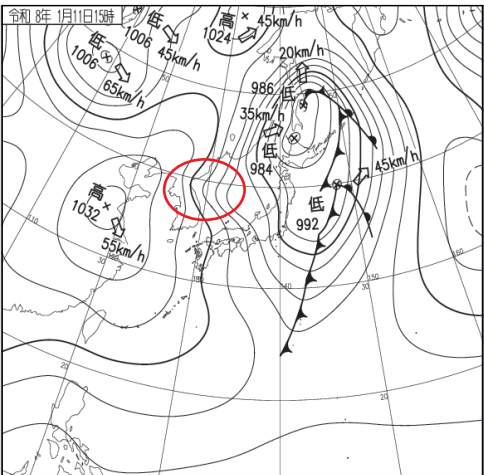
2026年1月11日18時の気象衛星画像

図版：tenki.jp（日本気象協会）



2026年1月11日の海面水温

図版：気象庁



2026年1月16日15時の地上天気図

図版：気象庁

今年度、私が担当する3年生の日本史探究では夏休み明け、1年生の歴史総合では夏と冬休み明け提出の自由課題として展覧会評を書いてもらった。その1年生提出分の中に天王洲にあるWHAT MUSEUMで開催中（3月1日まで）の展覧会「諏訪敦一きみはうつくしい」を取り上げたものがあった。同展は現代日本を代表するリアリズムの画家、諏訪敦（1967年生まれ）の3年ぶりの大規模な個展。展覧会評はなかなかよく書けていて、気になってはいたもののまだ訪れていなかった展覧会に1月12日、予定を変更して訪れた。

展覧会はこれまでの諏訪の画業を振り返りつつ、画家のいまを紹介するものだった。と書くと当たり前の内容だが、主として人物画を描いてきた諏訪がコロナ禍に人を描く意欲をなくし、そこから再び人を描くために人とモノの「汀」を描くことを試みる、その試みそのものが最新作として展示されていた（5章立てのchapter5）。この展覧会がまず興味深いのは、武蔵野美術大学教授も務め、卓越した技術をもって社会的に成功した（ように見える）画家の「描けない」苦悩を正面から扱っているところだろう。この画家がこの先に描くものを知りたくなる、そんな展覧会である。

一方、個人的に惹かれたのは亡き人を多く描いたchapter2と、画家自身の家族の死を描いたchapter3。特に印象に残った作品をいくつか挙げる。《正しいものは美しい》（2017-18）は遺族の依頼で描かれた亡き医学生 of 肖像画で、描く際の資料にした両親・妹弟のスケッチとともに展示。《点滴を携えて美術館に訪れた男性（岡田林太郎像）》（2022）は、3年前の諏訪の個展を見に来た岡田氏（みずき書林代表）のスケッチ。諏訪の父親と同じ病気で、この7か月後に45歳で亡くなっている。chapter3には3年前にも展示されていた病室に横たわる父親の絵に加えて、介護の末、2024年12月に看取った母親の絵を展示。両親の手を描いた絵（左下）は、母親の死によって当初とは違った感情を見るものに懐かせる。私が人に興味があるからかも知れないが、総じてリアルに人を描いた絵には素朴な特別さを感じる。勝手ながら、諏訪にはやはり人を描いてほしい。

実は3年前に府中市美術館で開催された諏訪の個展「諏訪敦一眼窩裏の火事」は、『四季』82号（2023年1月発行）で取り上げている。この時は色々な縁がつながって、諏訪氏本人のTwitterで私の書いた『四季』の頁を紹介してもらおうという希有な出来事もあった。82号には諏訪と同じ武蔵美の教授で私が世話になったある先生の訃報について書いたのだが、その訃報を受け取ったのは12月27日、下田の上原美術館に出かけた日だった。たまたま去年のちょうど同じ日、上原美術館

を訪れると、館に着くなり、知り合いの学芸員さんに「今日は浅井和春先生が来るよ」と教えてもらった。私の恩師、学生時代のゼミの先生である。館内で待ち構えているとゼミの先輩（今は別の大学の教員になっている）とともに現れ、一緒に展覧会を見ることになった。帰りは先生と一緒に先輩の車に乗せてもらい、車内ではかつてのゼミ生たちの話で盛り上がった。3年前とは違う和やかな帰路になった。

上原美術館に見に行ったのは伊豆の仏像。初公開の像もあったが、展覧会のテーマは「再会」。上原でも諏訪の個展でも多くの作品と再会したが、この歳になると展覧会が人との再会の場になることも少なくない。間もなく卒業する3年生とは、おそらく三田で再会することが多いだろうが、もし美術館でばったり出会ったら、声をかけてもらえると嬉しい。



《father / 父の手を組ませる母の手》1999年
（WHAT MUSEUMウェブサイトより）

(Hara)

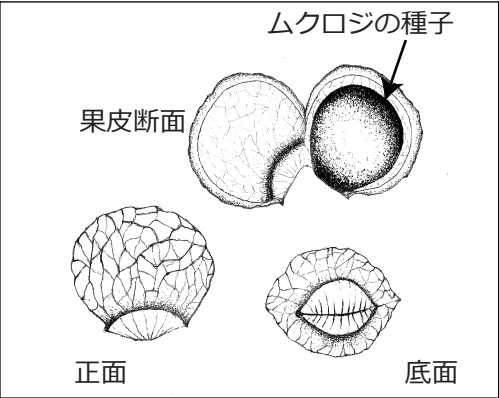
漢名で『無患子(すなわち、子が患わ無い)』と書く。花と果皮(種子を取り除いた半透明の部分)に薬用成分を含む薬用植物だが、果実全体では溶血や呼吸麻痺を起こす成分を含むので注意を要する。乾燥させた果皮は、強壮、止血、去痰などの効能がある。また、果皮はサポニンを含むため、洗剤の代用として使われてきた歴史があり、種子は正月の羽根つきの玉などに使用されてきた(出典:原色牧野和漢薬草大図鑑)。校内ではホームルーム棟の南東角に1本あるので見ておくとい。この木は、今はマンションになってしまった寮跡地に生えていたものを種から育てた本校の歴史遺産でもある。

[2025年10月～2026年1月までの開花情報]

Grass

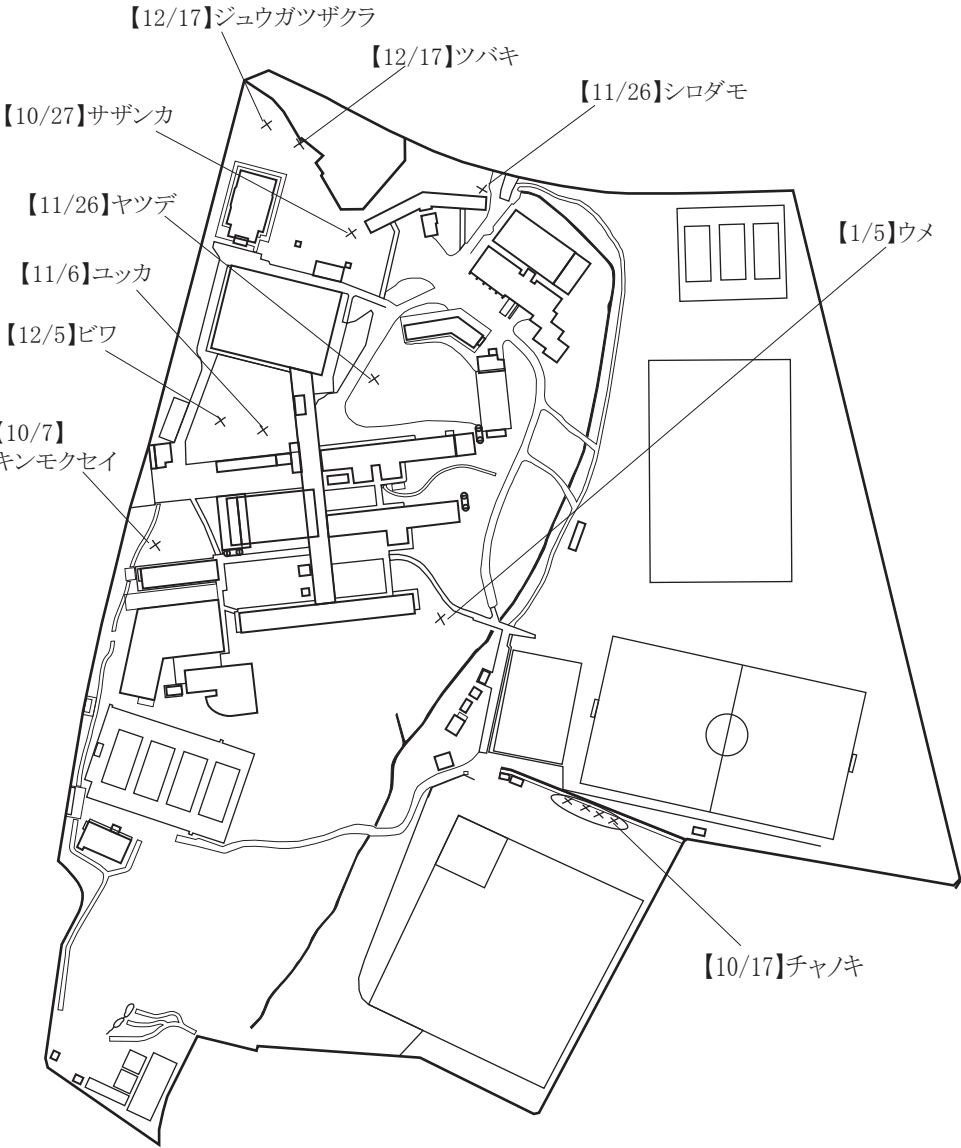
- 7.Oct アキノノゲシ, セイタカアワダチソウ, アメリカセンダングサ, チカラシバ, ヒメジソ
- 17.Oct サクラタデ, オギ
- 6.Nov ホトギス, カントウヨメナ, シロバナセンダングサ
- 5.Jan オオイヌノフグリ

【ムクロジ】
ムクロジ科ムクロジ属



(Aramaki)

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術 (博物館)	原 浩史 (Hara)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	日本文化 (香道)	井之浦 茉里 (Inoura)
	日本文化 (茶道)	池田 卓也 (Ikeda)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	植物画・編集	荒巻 知子 (Aramaki)